様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０１５８６

研究課題名（和文）オリンピック・パラリンピック競技大会開催国におけるマナー教育の在り方に関する研究

研究課題名（英文）The manner education in the host country for the Olympic and paralympic Games

研究代表者
真田　久（SANADA, Hisashi）

筑波大学・体育系・教授

研究者番号：３０１５４１２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：オリンピック・パラリンピック競技会開催国におけるマナー教育については、ロンドン2012やリオデジャネイロ2016大会の開催国では、国際オリンピック委員会の示した価値教育に基づいて行われている傾向が強いことが明らかになった。その国の歴史や文化の影響を受けていることが明らかになった。東京2020を目指した日本のオリンピック・パラリンピック教育においては、西洋的なマナーの習得とともに、相手を尊重し思いやる内容が強調されていることが明らかになった。日本はマナー教育については東京1964大会の際にも行われており、フェアプレーなどにつなげて展開することが望ましいと思われる。

研究成果の概要（英文）：The contents of manner education in the host country for the London 2012 and Rio de Janeiro 2016 consist of value education which derive from IOC and IPC. The manner education for Tokyo 2020 consists of Japanese traditional culture and its history that they contribute for others. Japan had manner education since Tokyo 1964 and this program is involved in the Olympic and Paralympic education by Tokyo Metropolitan Government and Japan Sport Agency.The manner education in Japan has a feature of thoughtfulness and sympathy with others.
To promote manner education for Tokyo 2020, it would be more effective in case that FairPlay and cheer for foreign athletes would be involved in that program.

研究分野：スポーツ人類学

キーワード：manner　education　Olympic education　Olympic Games　Paralympic Games

１．研究開始当初の背景

2013 年 9 月の IOC 総会において、2020 年のオリンピック・パラリンピック競技大会の開催地に東京が選ばれた。これにより、東京都ですでに続けられていたオリンピック教育は、オリンピック・パラリンピック競技大会開催国における教育として再考されるようになり、開催国としてのマナー教育についても検討していく必要が生じた。こうした背景のもと、オリンピック教育の視点を踏まえて開催国におけるマナー教育について研究することになった。

２．研究の目的

日本において開催されたオリンピック競技大会や 2012 年に開催されたロンドン大会、および本研究の期間内に開催が予定されている2016年リオデジャネイロ大会2018年の平昌大会に向けたマナー教育の内容と特徴を検討し、それぞれの特徴を分析することにより、2020 年東京大会におけるマナー教育のあり方について明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

オリンピック教育やパラリンピック教育に関して出版された印刷物についての分析、およびマナー教育が行われている現地に赴いての実地研究と聞き取り調査を行った。

1964 年の東京大会について、大会に向けた学校教育および社会教育事業を分析し、マナー教育に関連する史資料を収集した。また、同様に 1972 年札幌、1998 年長野大会時の資料を収集するとともに、関係者にインタビュー調査を行った。さらに、2012 年のロンドンオリンピック・パラリンピック競技大会に関するマナー教育の内容と実態について検討した 。調査に当たっては、ロンドンが 2012 年のオリンピック・パラリンピック競技大会を開催するにあたり、学校教育においてどのようなマナー教育を展開したのかも検討した。

４．研究成果

(1)東京 1964 オリンピック競技会の折のマナー教育は、文部省により実施されたオリンピック学習において、次の内容で行われていたことが明らかになった。

・外国人観光客に対する親切な対応
・日本人としての誇りと自覚
・街の美化運動（ゴミ拾いや花で学校や周囲をきれいに飾るなどの美化運動）

さらに文部省発行のオリンピック学習のテキストには、日本人選手の応援のみならず、国境や宗教を超えて、様々な人々に対してエールを贈ることの重要さにも言及されており、スポーツマンシップやフェアプレイについてもマナー教育として行われていた。

また東京都以外の府県でもオリンピック学習が行われ、京都市のオリンピック教育のテキストでは、真の日本文化、古都を理解してもらうことを目指して、おもてなしの態度を身につけることが期待されていた。

(2)ロンドン 2012 大会におけるマナー教育は、オリンピックとパラリンピックに関する価値教育の中で行われていた。価値とは、敬意・尊敬、友情、卓越性というオリンピックの価値と、強い意志、勇気、公平、インスピレーションという 4 つのパラリンピックの価値であった。これらの価値を学校教育の中で身につけることが、オリンピック教育として、またパラリンピック教育の中核的部分に位置付けられていた。このような価値を身につけて他者に接することがマナー教育の展開と考えられていた。

以上のことから、マナー教育は大会の開催国において、1964 年の日本のように、外国人に対するホスピタリティという点や、国籍

や民族の相違を超えて応援し合う態度、尊敬や友情などの価値を身につけることが、日本におけるマナー教育のレガシーとして重要ではないかと考えられる。

(3)リオデジャネイロ 2016 大会の教育プログラムでは、「トランスフォルマ」(改革)というプログラムが多くの学校で行われていたが、大会期間中のプログラムとしては、予算不足から、生徒の交流活動などは限定的に行われていた。このプログラムの中には、IOC の掲げるオリンピックの価値、卓越性、友情、敬意・尊重の 3 つが中心であった。マナーやホスピタリティについては特に言及されたものはなかった。一方、ボランティアの育成については、実際のボランティアに対して聞き取り調査を行った。その結果、ホスピタリティについての教育は、困っている人に対して親切に接することが強調されていたが、それ以上のものはなかった。またマナーについては、特に強調されたものはなく、ボランティアについては、予算の逼迫から十分なトレーニングがなされていないのが実態であった。

(4)東京 2020 大会を控えた日本においては、東京都の公立学校 2300 校全てで年間 35 時間以上をめどに行われたオリンピック・パラリンピック教育において、育成すべき 5 つの資質、「 ボランティアマインド」「障害者理解」「スポーツ志向」「日本人としての自覚と誇り」「豊かな国際感覚」があげられ、その中の「ボランティアマインド」「日本人としての自覚と誇り」には、おもてなしの心やマナーについて言及されていた。また、2015 年度から展開されたスポーツ庁委託事業「オリンピック・パラリンピックムーブメント全国展開事業」では、「おもてなし精神を備えた大会ボランティアおよび都市ボランティア等の養成」が 5 つのテーマの中に入っているように、日本における教育プログラムには、マナーやおもてなしについての内容がしっかり盛り込まれ、各学校でも積極的に学習されていることが明らかになった。

(5)最終年に平昌 2018 冬季大会において、どのようなマナー教育が行われているのかについて情報を収集した。主にはボランティアの育成プログラムの中で、笑顔で接すること、丁寧に案内することなどがマナー教育として行われていたが、そのほかには特にマナー教育に該当するものはなかった。

(6)筑波大学の附属学校において、高校生対象のボランティア育成セミナーにおいて、おもてなしの心やマナー教育をプログラムの一つと位置付けて実施した。特別支援学校の生徒も参加し、普通学校の高校生とのコミュニケーションを取りやすくするためにも、お互いが相手を思いやるためのマナー教育が必要であることが確認された。マナー教育について、高校生は興味を抱いて臨んでいたことから、日本人としてのアイデンティティの形成に役立つものと考えられた。海外でのマナーやホスピタリティ教育と国内での教育プログラムを比較すると、日本のマナー教育は、相手への配慮を重んじていることが明らかになった。以上のことから、日本のオリンピック教育やパラリンピック教育において、マナー教育が重視されていることがそもそも大きな特徴の一つであるが、東京 2020 大会に向けては、フェアプレイや外国人アスリートへの応援・称賛を含めていくことが、スポーツにおけるマナー教育として重要ではないかと示唆された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　６　件）

(1) Sanada，H.: Education Programme for Tokyo 2020 Olympic and Paralympic

Games. IOA Journal 11&12,46-51, 2017.12 査読無し

(2)真田久：オリンピック・パラリンピックに向けた国際理解．*中学校* 770号，全日本中学校長会，12-15，2017年11月．査読無し

(3)真田久：２０２０年以降も続くオリンピック・パラリンピック教育を.体育科教育 65-3，大修館書店，58-61，2017年3月．査読無し

(4)真田久：オリンピック・パラリンピック教育の意義と価値.初等教育資料 949,東洋館出版社,10-15,2017年2月．査読無し

(5)真田久：オリンピック・パラリンピック教育の推進.体育の科学 66-3,杏林書院，207-212,2016年3月．査読無し

(6)真田久：オリンピック・ムーブメントとオリンピック教育.スポーツ教育学研究,日本スポーツ教育学会 34-2: 9-33，2015年 査読無し

〔学会発表〕（計　４　件）

(1)真田久：東京 2020 とボランティア．国際ボランティア学会第 19 回大会シンポジウム「スポーツとボランティア ～2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けて～」東京，2018 年 3 月 3 日

(2)Sanada, H.: The Olympic and Paralympic Education for 2020. The International Symposium of the Higher Institute of Sport and Physical Education. Ksar-Said (Tunisia), 2017-4-28.

(3)Sanada, H.: Olympic Values Education Programme. Singapore Sport Conference, Singapore, 2016-5-2

(4)真田久：東京オリンピック・パラリンピックに向けて高校生ができること．東京都国際教育研究協議会，東京，2016年1月15日

〔図書〕（計　１　件）

(1)Sanada, H.: Japan; Olympic education for peace and international cultural understanding. Roland Naul, Deanna Binder, Antonín Rychtecký and Ian Culpan (Eds): Olympic Education An international review. Routledge, pp. 192-205, 2017-3.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計　0　件）

〔その他〕

DVD：国際社会での活躍に向けた道徳教材

(1)真田久,江上いずみ,藤川大佑,佐野慎輔：「おもてなし」の心に学ぶコミュニケーション.大日本印刷株式会社,2017 年

(2)真田久,江上いずみ,澤江幸則,藤川大佑,佐野慎輔：スポーツを通して学ぶ「共生社会」.大日本印刷株式会社,2017 年

６．研究組織

(1)研究代表者

真田 久（SANADA,Hisashi）

筑波大学・体育系・教授

研究者番号：30154123

(2)研究協力者

大林 太朗（OBAYASHI,Taro）

江上 いずみ（EGAMI,Izumi）